

2020.1.5 第一主日聖餐礼拝

コロサイ 3:12-17「神に向かって歌う」

聖書

12 ですから、あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を着なさい。

13 互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。

14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です。

15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのために、あなたがたも召されて一つのからだとなったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。

16 キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、忠告し合い、詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。

17 ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行いなさい。

はじめに

今日から数回に亘り 2020 年の教会に与えられた目標に思いを向けます。今年の目標は「神に向かって歌う」です。豊田教会の歴史の中で賛美を目標に掲げて歩んだ年は今までなかったのではないのでしょうか。少なくとも私の記憶にはないので、とても新鮮な気持ちで神さまからこの目標をいただきました。お互いの賛美に対する意識が向上し、賛美の喜びが満ちることで個人も教会も元気にされていくことを願います。賛美についての思い巡らしを何回かに分けて行いますので、今日は概観的な内容になることをご理解ください。

1. 去年の恵みを継続しよう

新たな一年の目標に向かって歩み出しますが、去年の教会標語であります「喜び・祈り・感謝の生活」（I テサロニケ 5:16-18）も心に留めて信仰生活を送ることができますように願います。と言いますのも、喜び・祈り・感謝の生活があって賛美が生まれてくるのですから、これを疎かにして形だけ賛美を盛んにさせても、それは神さまに喜ばれるものではありません。

喜び・祈り・感謝の生活を去年の目標としましたが、一年間心に留めたからと言ってそれが身に着くかと言えばそうではありません。元より神さまを知らなかった者が救いに与り教会生活を送るようになるのですが、それまでは無縁だったキリスト教の価値観や生き方を身に着けるためには、長い年月が必要です。信仰生活はとて地道なもので、毎日の小さな積み重ねがいつの日か大きな財産になっていくのです。因みに暑さ0.1ミリの新聞紙を何回折り重ねていくと富士山の高さになるでしょうか。26回です。月までの距離は42回だそうです。計算上の話ですが「塵も積もれば山となる」ということわざのように、信仰の世界も同じで地道な一步一步が大切です。毎日の積み重ねがやがて私たちの生き方を大きく変えていることになるのです。昨年掲げた「喜び・祈り・感謝の生活」も心の片隅に置きながら、今年目標である賛美の恵みを深めることに思いを向けていきましょう。

2. 賛美は神さまの恵みへの応答

教会では多くの集会で賛美歌を歌います。歌うことを常としていない方にとっては、初めて教会に来られ賛美歌を歌うことに少し抵抗があるかもしれません。音符も読めない、リズムも取れない私などはその典型で、歌うことは大の苦手でしたから、教会に行くようになっても相当長い間教会の賛美には馴染めなかつたです。それゆえ牧師になっても賛美に対する理解も開眼も鈍いものなので、教会に与えられた賛美の恵みを十分にお届けできなくて申し訳ない思いです。私にとっては賛美は苦手な分野ですが、その代わりに信徒の皆さんには豊かな賛美の賜物が与えられていますので、その賜物を活かして教会賛美を導いてくださっていますことを嬉しく思います。

私のように賛美に対する消極的な感覚はどこから生まれてくるのでしょうか。それは、賛美とは何かを正しく理解していないところから生じるものだと思います。私はかつて賛美＝声に出して歌うことだと思っていました。そうするとうまく声に出せないと、その人は賛美の恵みに与れないことになってしまいます。しかし、賛美とは本来神さまをほめたたえる信仰者の証であり告白ですから、そこに必ずしも音楽性が伴ってなくても賛美は成り立ちます。もちろん旧約には聖歌隊や楽器を使った賛美がたくさん出てきますから、音楽性を抜きにして賛美を語ることはできないでしょう。創世記 5:21 にユバルという人が登場しますが、「彼は豎琴と笛を奏でるすべての者の先祖となった」とあり、音楽という創作的な世界は創造主である神さまご自身から人に与えられた恵みであり、賛美と音楽性は密接な関係を持っていることは確かです。賛美の音楽性を認めつつも、賛美の本来の意味は、神さまの恵みに対する信仰者の応答であり、感謝のささげものであることを忘れないようにしましょう。「私たちは主イエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。」(ヘブル 13:15)とあるように、神さまからたくさんの恵みをいただいていることへの感謝が賛美となって表れるのです。

3. 賛美は神さまへのささげもの

コロサイ 3:16 に「詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。」とあります。すでにお話しましたように、賛美は神さまへの応答ですから、ささげる対象は神さまご自身です。それが「神に向かって歌いなさい」という意味です。このことは多くのクリスチャンアーティストたちが心に留めている点ではないでしょうか。一般的にアーティストは自分に向けられる視線に喜びを感じるでしょう。しかし、クリスチャンアーティストたちは、神さまに目を向け、神さまを賛美することを喜ぶ人たちです。昨年 11 月末に久米小百合さんをお迎えしてコンサートを行いました。久米さんはかつて久保田早紀という名で音楽活動をしておられ、「異邦人」というヒット曲を世に送り出された方です。その名は今も人々の記憶に深く留まって

いて、今回「久保田早紀の異邦人」を懐かしく思い多くの方々が来場されました。あの「異邦人」を生でもう一度聞きたいという気持ちはよく分かります。ですから久米さんもコンサートのアンコールで披露してくださったのです。「異邦人」がすべてではないと思いますが、「異邦人が聞けて良かった」という感想を何人かの方々からお聞きしていますので、「異邦人」を聞きたくておいでになった方々がたくさんおられたことがわかります。しかし、久米さんご自身はどうかというと、クリスチャンになって音楽宣教師として活動を始められたわけですが、ある時期までは「異邦人」を歌わなかったそうです。ご本人にとっては「久保田早紀の異邦人」は過去のもの。今はイエスさまのために仕える音楽宣教師久米小百合であり、イエスさまを賛美することを無上の喜びとして神さまに仕えておられます。私たちも久米さんと同じようにイエスさまを賛美することを無上の喜びに感じて神さまを賛美しています。その理由は、イエスさまによって救われたからです。これについては次主日礼拝で扱いますが、賛美はイエスさまによって救われた者がその感謝を表すために神さまにささげる献げものなのです。

4. 賛美の豊かさを礼拝の中で

最後に神さまを賛美する場所として2つの場を心に留めましょう。一つは礼拝の場であり、もう一つは私たちが置かれている日常の場です。このことについては、(1/19が教会総会なので)1/26の礼拝で取り上げますが、少しだけ触れておきます。礼拝の場と日常の場が意味するところは、「公」と「私」であり、「教会共同体」と「個人」の場です。この両方の場で賛美の恵みが豊かにされることを求めて歩みましょう。礼拝プログラムの冒頭に賛美が来ますが、それはまずに神さまに感謝し、神さまをほめたたえることが私たちに求められていることだからです。しかもそれが、個人ではなくイエスさまによって救いに与った者が一斉に声を合わせて神さまをほめたたえるわけで、礼拝の最初の賛美は特に大切な意味を持っています。可能な限り礼拝に余裕をもっておいでくださり、備えられた中から発せられる第一声は、大きな喜びをもってイエスさまの下に届けられるのです。

そしてもう一つは私たちの個人の間です。家庭、学校、職場、地域と言われる生活の間の中での賛美が豊かにされることを求めましょう。賛美のある日常生活が送れるなら、そこには感謝と平和が実現しているということです。イエスさまの恵みを置かれた生活の間で味わって歩みたいですね。

結び

今年の教会目標である「神に向かって歌う」ことの概観を見ました。賛美は神さまへの感謝のささげものです。そのささげものが礼拝の中で、そして日常の中でなされるとき、イエスさまは喜んで私たちの賛美をお受けになります。教会生活と日常生活に喜びを注いでいただきましょう。喜びの満ちる場所には賛美も満ち溢れます。そのような楽しい場所に人々も集まってくるでしょう。私たちの周りに賛美が満ち溢れる一年となりますように心からお祈りいたします。